

アドバイジング・カウンセリング部門（IB740号室）活動報告

現・国際交流協力推進本部

田 所 真 生 子

はじめに

筆者は、高木ひとみ特任准教授の代替教員として、2011年5月16日付けで着任した。

2年目となる2012年度は新たな試みも行なった。本報告では大きく「相談活動」、「国際教育プログラム」、「授業・FD/SD 活動・その他」の3つに分け、主な活動について報告する。

I. 相談活動

2012年度は、基本的に月～金曜日の午前10時から午後4時までを相談時間としていたが、それ以外にも必要ときには適宜相談に応じていた。言語は日本語あるいは英語により行なった。相談件数と内容については、表の通りである。毎回悩むところであるが、個々の相談をどのように分類し計上するのは難しい。さまざまな性質の相談が寄せられるが、例えば、一度の来談で多くの分野にまたがる相談をする者もいれば、ある主訴で来談したとしても、よく聴いてみるとその背後にさまざまな問題が潜んでいる場合もあり、それらが複雑に絡み合っていることが多い。また、継続して面接をしていると、多様なテーマが現れることもある。多様な事柄の中に共通した一つのテーマが現れることもある。さらに面接中に得られた何らかのアイデアを人生や生活でのさまざまな局面に応用し、統合していくこともあるため、簡単に分類したり、一つにくくるとは困難である。ここでは延べ件数をあげておくことにする。

相談内容であるが、カウンセリングとして継続して関わるケースで多くみられる傾向があるのは、心身不調・精神不安、学業・研究について、生活・適応、将来の進路や就職について、研究室や指導教員との人間関係等であった。

忙しい研究や実験と論文執筆、異文化適応のストレ

スから心身不調・精神不安を訴えるケースが多数あった。中には、授業に出られなくなってしまうたり、期待されていた学業・研究成果が上がらず、そこから人間関係の困難さや心身の不調につながり、悪循環あるいは負の相乗効果に陥るケースも見受けられた。深刻になる前に日頃から心のケアを提供する側ができることの例としては、ストレスと上手くつきあい、体調管理や自分をケアする習慣を身につけるためのプログラムを提供することが効果的ではないかと思われる。オリエンテーションで異文化適応やカルチャーショック、そしてその対処法について説明してはいるが、フォローアップや定期的なワークショップを行なうことが考えられる。また同じストレスや不安を抱える学生同士のサポート・グループのようなものを作ることも有効であろう。また、母国ですでに精神科に通っていたり、既往歴のある留学生もよく見られるようになり、今後もさまざまなサポートや対応が必要になってくると思われる。

指導教員や研究室の学生たちと、文化の違いやコミュニケーションギャップ等で、上手く関係を作ることができないという悩みを持つ事例もあった。研究室によっては慣習となっている暗黙のルールのようなものがあり、留学生が疎外感を持つケースがあった。また研究室の人々はとても親切に対応してくれていて感謝しているのに、どうしても研究室のスタイルに合わせるができず悩んでいるケースもあった。また、教職員や他の学生が意識せずに口にした不用意な言葉や態度に傷ついたり悩んだりしているケースもある。留学生にも日本の文化の中でどのように人間関係を築いていくのか、本人の気持ちを大切にしつつ適応を促す支援が必要であるが、これから大学や社会の国際化がますます進んでいく中、大学構成員の意識を高め、よりよい対応ができるように目指していく他、社会にも働きかけていくことが望まれる。

進路や就職については、望んでいた分野とのミス

相談件数記録 (2012年4月～2013年3月)

相談内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
指導教員・研究室	3	3	2	2				1	1	3	7	5	27
学業・研究・日本語	6	5	11	13	1	1	3	3	3	14	18	11	89
入国・在留関係			1	1			1	2	2				7
宿舍			1					1	1	2			5
奨学金・授業料							1		1	2			4
医療・健康		1	2	3			1	3		1	6	7	24
生活・適応		2	9	15	1	2	4	6	6	4	6	2	57
進路・就職・インターンシップ	9	4	1	4		7	5	2	2	2		1	37
帰国			1	1				1	2				5
家庭・家族		1	1	3			1	1			3	3	13
地域	1	1								1			3
人間関係	1			5		1	2	2	1	2	2		16
心身不調・精神不安	4	2	9	13	1	1	3	4	2	14	20	12	85
国際交流	6	1	6	2	1	2	7	10	9	2	9	8	63
その他	2	4	4	10	4	5	5	4	5	5	8	6	62
合計	32	24	48	72	8	19	33	40	35	52	79	55	497

マッチや専攻の変更についての相談があった他、人生設計という大きな視点、長いスパンで捉え、進路や就職について取り組んで行くケースもあった。就職活動における具体的な対策（例えば、効果的な履歴書の書き方や面接方法等）については、キャリアディベロップメントオフィスと連携をとって対応することができ、筆者は主に相談者の内面的な自己分析やビジョンの明確化、心的サポート等、キャリアカウンセリング的なアプローチで支援を行なった。進路については、大学院入試再受験をきっかけに、自分の専門分野とそれを研究できる場所を見直し、希望の研究科に進学することになったケースもあった。

昨年に比べ、指導教員や留学生担当教員、保健管理室のみならず、その他の教職員と連携を取ることがよくあった。時に留学生が英語も日本語も堪能でない場合、その留学生の母語を話す者の助けが必要となることもある。最近では、留学生が翻訳ソフトを使い、メールのやりとりで支援を続けるというケースもあった。もちろんコミュニケーションの難しさや制限はあるが、このようなツールを使って工夫できることの可能性を実感する機会となった。

学生全般にいえることではあるが、特に留学生は青年としての発達課題をもつと同時に、異文化に適應するという課題の両方を抱えることになる。この留学を通しての体験が、今は辛いことがあったとしても、後に「あの時期があったから今の自分がある」と言えるような成長の機会となるよう、彼らの内なる力を信じ

ながら、それを活かしていくことができるように、よりよいサポートをしていきたい。

II. 国際教育プログラム

このようなプログラムを通して、一般学生・留学生の異文化理解や交流を図るだけでなく、学生の不適応に対する予防・開発的役割を持つとともに、今後、国際社会や地域社会で将来を担う人材を育成する場を提供できることを痛感した一年であった。

◆スモールワールド・コーヒーアワー

2005年の後期に発足した「スモールワールド・コーヒーアワー」（以下、コーヒーアワーとする）を今年も継続して行なった。

2012年度、学生スタッフは新たなチャレンジを試みる、新しいスタッフを増やすことを目標とし、「新たな挑戦」というテーマを掲げた。通常は前期3回、後期3回の計6回のコーヒーアワーを開催しているが、毎回好評で強い要望があったため、1月に番外編としてイベントを特別に開催することとなった。計7回で約480人の参加者があった。前期のテーマは4月「うそつき自己紹介」、5月「ジェスチャーゲーム」、6月「Coffee Hour 緑日☆～うち作り～」、後期は、10月「自己紹介ビンゴ」、11月「利き茶」、12月「日本の習字を体験しよう!」、1月「日本のお正月の遊びを体験しよう!」であった。

コーヒーアワーのイベント開催は月に1度、各学期に3回あるいは4回の計7回であったが、学生スタッフはその準備のために各回につき3～5回程度、ほぼ毎週1回のミーティングを重ねて企画を練っていた。多数の参加者があり、入退場自由なイベントであるため、毎回テーマを発案することは容易ではないが、本年度は目標にも掲げてあるように、どのようなアクティビティにすると来場者が参加しやすく、分かりやすく飽きずに、そして楽しく交流を促進できるのか、また異文化理解を深められるのかを考えながら企画を進めた。学期の初めには、新入学生を考慮し新しい出逢いの場を創るような自己紹介系のアクティビティを取り入れている。また、いろいろな文化を学ぶ機会を設けたり、日本の文化に触れたり、季節感を味わえるようなテーマを選んだりした。本年度は新たな試みもいくつかあった。4月にはいつも行なっている「自己紹介ビンゴ」ではなく「うそつき自己紹介」を行なった。6月には日本の夏祭りの雰囲気再現し、暑くなる季節に向けて、Myうちわを手作りした。作品に参加者それぞれの個性が表れたユニークな企画となった。特筆すべきは11月の「利き茶会」であろう。この会では、何種類かのお茶を用意し、和菓子を食べながら飲み比べてもらい、最後にどのお茶に人気があったか投票発表をした。「利き茶」とは別に名古屋大学茶道部松尾流の方々にご協力いただき、茶道のお点前を披露し、実際に参加者にお抹茶を試飲してもらうコーナーを設けた。他団体とともにイベントを創り上げるのは、少なくとも筆者が担当してからは初の試みであり、準備期間も限られていたが、学生達は連絡をよく取り合っていたようで、当日は大成功を収めることが

できた。これがきっかけでお互いの交流も始まったようである。他団体とのコラボレーション企画であり、また量の準備や運搬等大変なこともあったが、他にも様々な工夫をこらし、イベントは大盛況であった。このような企画はチャレンジングであったが、いつにも増して参加者も楽しんでいる様子で、「これまでのコーヒーアワーで最高だった」という者もいるように、学生スタッフたちも達成感と充実感を味わっていたようである。

さて、コーヒーアワーを通して行なっている国際交流活動を表面的なイメージだけで捉え、「遊び」のイベントとして見られてしまうこともあるが、実は様々な効果を生み出している。表の目的としては、留学生や一般学生、教職員を含めた大学構成員に国際交流を通しての新しい出逢い・つながりの場やリラックスした雰囲気の中での対話の場を提供することである。また参加者によって、交流や友達作り、言語の実践、留学情報収集といった様々な目的・意図を持ってやって来るが、それを叶える場であるといえるし、異文化理解を促進する役割も持っている。そして、もう一つの目的として、リラックスした雰囲気の中で交流したり対話する場、友人関係を深めていくきっかけや場を提供することで、留学生（あるいは一般学生であっても）が抱えているものが問題化あるいは深刻化するのを未然に防ぐ機会となるような予防的な側面や、学生同士のサポートの機能も兼ねている。そして、相談室に来訪するまではなくとも、会話をしながら接する中で相談を受けることもある。本年度は、そのような機能の側面を実感する機会が何度もあった。さらに学生が主体となって協働で運営する活動を通して、イベントの

コーヒーアワーの風景 ↓



↑ 茶道部のお点前を味わう



← 習字体験会の後で…

企画・運営・ファシリテーション能力や交流のスキル、意識を高める教育・開発的な側面も持っている。毎回コーヒーアワーの開催にあたっては、設営、受付、司会進行、茶菓子などのセッティング、後片付け等の実務的な作業があるが、それ以外にもイベント中には参加者のサポートなど気遣いやもてなしの心、創意工夫が求められる。イベント後には振り返りの時間を持っているが、学生スタッフたちは毎回何らかの気づきを得ているようであり、また彼らの成長や隠れた才能に目を見張ることがよくある。

2月に本年度の活動の振り返りと引き継ぎの機会を持った。具体的な引き継ぎやビジョンまで様々なことを話し合い、これまでの伝統を大切にしながら新たな挑戦をしていくことが共有された。学生は授業やゼミの他、就職活動や留学などで活動に参加することが難しいことも多く、経験豊かな学生が卒業していくこともあり、そのノウハウの引き継ぎと新スタッフの勧誘、優秀な人材の確保が急務となっていたが、この春からたくさんの新スタッフが加入し、今後が楽しみである。現在2名の留学生スタッフがいるが、留学生を参加者としてだけでなく、スタッフとしてどう活躍してもらうかについては今後の課題である。

「卒業生を送る会」で、コーヒーアワーの活動で培ってきた経験がどれだけ豊かでかけがえの無いものであったかを語り合う卒業生を見て、コーヒーアワーでの活動がいかに参加学生や運営する学生たちの成長の場となっているかを再確認した。今後も、このように様々な可能性を秘めた「コーヒーアワー」の活動を通じて、学生たちの成長を支えていきたい。

◆ MEIPLES：名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラム（メイプルズ）

IF@N：名古屋大学国際学生フォーラム（アイファン）

2010年から過去2回にわたり、名古屋大学国際学生フォーラム（以下、IF@Nとする）を開催してきた。本フォーラムは「出会う・つながる・ひろがる」というコンセプトをもった「学生の、学生による、学生のためのフォーラム」であり、名古屋大学に集うさまざまな文化・背景を持つ学生が、日本語・英語による自由闊達な討議・意見交換を通して、国際理解や相互理解を深めること、またこの活動により留学生・一般学生問わず国際的に活躍できる人材を育成することを目的としている。

留学生と一般学生が実行委員となり協働して創り上げるこのフォーラムは、実行委員や当日参加した学生達に様々な成長の機会やいい刺激を与えてきたが、過去2回の経験から、より包括的なプログラムに発展させる有用性と必要性が示唆された。そして、全学同窓会支援事業の助成をいただき、通年のプログラムとして実施することとなった。詳しくは本紀要に実践報告が掲載される予定であるので、そちらをご参照いただきたくことにし、ここでは簡単な報告としたい。

まず、前期では6回セミナーを開催し、名古屋大学の国際交流や留学生について理解し、国際交流概論として多様性を知り多様な人々と一緒に活動することを学び、問題解決やディスカッション方法、さらに議事録やアジェンダの作成方法といった実務についても学ぶ機会を持った。これらは体験を通して学習できるよう、また学生間のチームビルディングを図れるようなデザインを試みた。前期は欠席者や途中メンバーの入れ替わりはあったものの、毎回7～14名の参加があった。また外部講師（阿部仁一橋大学国際教育センター准教授）を招聘した回は、終日の公開ワークショップとし、学内外からの参加を募ったところ、計26名の参加があった。本ワークショップは「パーソナルリーダーシップ」という手法を使って、異なる文化を理解し受け入れる態度を身につけるための心構えと自分のビジョンに向かうための習慣について体験的に学ぶものであった。これは大きなインパクトをもたらしたようで、このワークショップをきっかけにMEIPLESに参加した学生や、留学を決意し、その後交換留学を果たす学生もいた。

そして後期には、これまで行なってきた「IF@N」を前期に培った知識とスキルの実践編と位置づけ、実際にフォーラムを企画・運営した。後期は、学部・研究科、学年といった垣根を越えて10名（一般学生8名と留学生2名）が実行委員を務めた。フォーラムの詳細い内容については、学生実行委員によって作成された『第三回 IF@N：名古屋大学国際学生フォーラム活動報告書』と『名古屋大学国際交流グループ 2012年度活動報告書』、そして本紀要の事業報告と実践報告をご参照いただきたい。

フォーラム自体は1日のイベントであるが、実行委員会は企画、運営、広報、報告書や引き継ぎ資料作成のすべてに関わり、これらの活動には多大な時間と労力を費やした。9月の後期活動開始から2月の最終振

前期セミナー内容

5月23日(水)	第1回セミナー：キックオフ，国際交流の基礎知識
6月6日(水)	第2回セミナー：異文化コミュニケーション 〈ねらい〉 コミュニケーション・ギャップの体験から，文化には固有の習慣や価値観があることを理解する
6月27日(水)	第3回セミナー：自己発見と他者理解 〈ねらい〉 自己発見や他者理解を深める
7月14日(土)	第4回セミナー：外部講師によるワークショップ～パーソナルリーダーシップ 〈ねらい〉 自分を知る，身体感覚とつながる，ヴィジョンング 多様な背景の仲間と共同作業をしていくための心構えやスキルを身につける
8月1日(水)	第5回セミナー：問題解決 〈ねらい〉 問題解決体験学習で何をまなぶことができるかを体験とおして知る 問題解決体験学習を通して，その過程で起こるさまざまなことがらに気づく
8月29日(水)	第6回セミナー：実務セミナー（議事録やアジェンダの作成方法など）

り返りと打ち上げを迎えるまで，実行委員会だけでもリハーサルを含め計19回のミーティングを行なった。ただ，第2回の実行委員がまとめてくれていた詳細な引き継ぎ資料が大変参考になり，感謝している。

11月12日に開催されたIF@N当日には，29名（留学生9名）の参加者があり，それにファシリテーターである実行委員を含めた39名が熱いディスカッションや交流を通して，有意義な時間を過ごした。それぞれのグループで工夫や協力をしながらディスカッションを進めていたようで，ディスカッション以外のアクティビティを含め，当日の参加者にとっても充実した貴重な体験となったようである。中には次年の実行委員になりたいと名乗りを上げる学生もいた。

IF@N フォーラム当日が終わった後も，MEIPLESの前期に行なった体験学習のアクティビティをもう一度やりたいという声や，他のアクティビティをファシリテートしてみたいという希望があり，実行委員会とは別に，MEIPLES>Returnsと題して2回のミーティングを行なった。また，3回のフォーラムを終えて，

歴代の実行委員が集まり，それぞれにとってIF@Nの体験がどのような意味を持ち，どのように活かされているのか，また今後IF@Nをどのように展開していくとよいのか等話し合い共有するために，3月にIF@N-Reunionを開催した。当日は，社会人となった卒業生も参加し，懇親会も含め13名が集まった。そこで分かったのは，MEIPLESやIF@N実行委員の活動が彼らの人生にとって大きな影響を与えているということであった。コーディネーターとしても試行錯誤の段階であるが，彼らの成長を知ることはコーディネーター冥利につきると感謝している。

毎回，実行委員の学生たちにとっても，教員コーディネーターにとっても大きな学びと成長をもたらしている本事業であるが，本年度は通年のMEIPLESとしての実施を試みた。この試みはまだ始まったばかりであり，発展途上であるが，さらに良いプログラムとなり多文化共生に貢献できる人材を育てていけるように努めていきたい。



◆名古屋大学国際交流グループ／Nagoya University Global Network 活動

名古屋大学では、国際交流や異文化理解を促進したり、留学生をサポートする活動を行なう学生グループが数多く存在し、キャンパスの国際化を支えている。留学生センターと連携しながら活動している「スモールワールド・コーヒアワー」、「ヘルプデスク」、「ランゲージシャワー」、「留学のとびら」、「IF@N：名古屋大学国際学生フォーラム」、そしてサークル活動として長い歴史を持つ「異文化交流サークル ACE」や「名古屋大学留学生会 NUFSA」等がある。他にも活動しているグループはあるが、上述のグループが集まり、2009年度に「Nagoya University Global Network」が発足した。当時は、各グループの代表者がランチ・ミーティングを開く等、お互いのグループ活動の課題やニーズ、ネットワークの可能性等を意見交換していたようである。

本年度は、その中の「ヘルプデスク」や「スモールワールド・コーヒアワー」が中心となり、グループ合同で、名大祭（6月9日、10日）においてフリーマーケットを行なった。校費で賄うことの難しい活動の幅を広げるための資金を集める目的で行なうフリーマーケットであり、その売上金は協力団体の間で配分された。この活動を通じ、団体を越えたスタッフの人材交流ができ、活動資金を得るだけでない有意義な機会となったようである。

また、年度末には、今回は海外留学室の岩城准教授の取りまとめにより、『名古屋大学国際交流グループ

2012年度活動報告書』が作成された。詳しくは、活動報告書を参照されたい。報告書の発行に関して、印刷物とするのかあるいはペーパーレスとインターネット上に掲載するのみとするのが検討課題であったが、今回はペーパーレスとし、ウェブ上にpdfファイルとして掲載することになった。

筆者は全てのグループと関わりを持っている訳ではないが、いくつかのグループで、活躍しているスタッフが留学したり卒業してしまうなど、活動に積極的に関わることでできる人材をどう確保するのか、またノウハウの共有をどのようにするのが共通の課題となっているようである。国際交流活動の広報・周知や新スタッフの勧誘等、お互いに協力している試みも見られるが、グループ間のネットワークを強め、このような共通の課題を見つけ、お互いに助けあい、いい影

響を与えあって、活動を発展させていくためにも、再びランチ・ミーティングのような意見交換の機会を設けるのもよいのではないかと考えている。

◆オリエンテーション活動

本年度は、新入留学生を対象とした全学オリエンテーション（4月9日、10月4日）において異文化適応についてのプレゼンテーションを日本語と英語で行なった。文化について、異文化適応のプロセスとカルチャーショックの症状や対処法について説明した。カルチャーショックは誰にでも起こりうる自然な反応であること、自分自身をケアする方法を見つけたり、サポートを受けることで乗り越えられること、文化を理解したり自分の成長につながるポジティブな体験であることを強調した。

このプレゼンテーションにより異文化コミュニケーションに興味を持つ学生もいたようである。また熱心に聞いたりメモをとったりしている姿も多く見受けられたが、その一方で、自分の心身の不調が不適応によるものと気づかずに悩んでいる留学生もいるようである。相談活動の項でも述べたが、今後、フォローアップセッションやワークショップ等の可能性を探っていきたいと考えている。

G30国際プログラムのオリエンテーションでは、白石氏と協力して生活についてのプレゼンテーションを行なった。また、G30プログラム教員向けのオリエンテーションに協力した。

他には、留学生宿舎の入居オリエンテーションにはできるだけ出席し、挨拶をすることで、存在を知ってもらい、距離を縮めることができるよう心がけた。

これはオリエンテーション活動ではないかもしれないが、「名古屋大学留学生ハンドブック」が改訂の時期となったため、執筆に協力した。

◆ワークショップ活動

・学生相談総合センターが行なっているピア・サポート養成講座において、「留学生の諸問題・留学生のつきあい方」というテーマでレクチャーを行なった。今回は2回目であるが、昨年同様一般的な留学生に関する基礎知識や名古屋大学の留学生や国際交流について紹介したり、留学生が相談したい内容について、異文化コミュニケーションや異文化適応のプロセス、そして留学生とのコミュニケーションで大切

なことを説明した。ピア・サポートに訪れる留学生も過去にいたとのことであり、一般の学生にも留学生について理解してもらえるよい機会となった。

- ・台湾国立嘉義大学来訪の際、名古屋大学における留学生対応や国際交流等についてプレゼンテーションをした。

Ⅲ. 授業・FD/SD 活動・その他

◆授業

本年度も後期の教養科目「留学生と日本－異文化を通しての日本理解－」の浮葉准教授を代表とする教員チームに参加し、主に「グループ活動から学ぶ」というまとめと振り返りの部分を担当した。

◆FD/SD 活動

- ・毎月1回保健管理室にて開かれている症例検討会に参加した。保健管理室精神科医との連携をはかり、助言を得ることのできる、よい研鑽の機会となっている。
- ・高等教育研究センターが名古屋大学の教員有志により立ち上げた「留学生研究会」があるが、筆者も参加した。2ヶ月に1度の頻度で行なわれるこの会は、様々なテーマで意見交換がなされる。本年度はG30新任教員オリエンテーションに協力した他、教職員のためのワークショップ「はじめて留学生を受け入れる－教員と留学生の信頼関係をどう築くか－」にケース提供、グループファシリテーターとして協力した。また、新任教員研修においてもポスターセッションに協力した。
- ・「留学生相談室スタディーグループ」は、2008年から高木氏が留学生支援や国際教育交流分野に関する勉強会として始めたグループであるが、休業中の間、国際交流協力推進本部の渡部氏が引き継ぎ、本年度は1～3月に1度の頻度で開催された。参加者は、名古屋大学教職員、大学院生、近郊大学職員であり、大学の垣根を越えて意見交換のできるよい機会となっている。
- ・部局向けの教員研修としてハラスメント相談センターと協力し、「留学生にどう向き合うか～ハラスメントの観点からみた異文化対応～」を行なった。
- ・学生相談総合センター主催の「学生対応に苦慮した時のためのセミナー」において、留学生に関する相

談について協力した。

- ・岐阜大学にて、「留学生の悩みにどう向き合うか～留学生支援と異文化対応、そしてその先へ～」というタイトルのもと、学習支援研修会（FD/SD）の講師を務めた。

◆その他

- ・G30国際プログラム学年担任教員との連携ミーティングに出席した。
- ・留学生支援や、国際教育、多文化カウンセリング、グローバル人材育成等に関して、学内外合わせ、できるだけ研修の機会を活用し研鑽を積むようこころがけた。今後の相談支援、教育業務に活かしていきたい。
- ・異文化コミュニケーション学会異文化教育実践研究会において、ワークショップ「Process Work への誘い～ Awareness Practice へのとびら～」を行なった。
- ・総合研究大学院大学の第8回大学院教育研究会「留学生と日本人学生が創り出すグローバルリーダー」において、「名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラムの試み～留学生と一般学生の協働プロジェクト“MEIPLES”・“国際学生フォーラム”実行委員会活動を通して～」の講演を行なった。
- ・日本認定留学カウンセラー協会（JACSC）によるインタビュー記事が掲載された。

おわりに

冒頭にも述べた通り、着任して2年目の2012年度であった。留学生のカウンセリングやアドバイジングといった活動を通して心理的・教育的支援をすることの重要さと同時に、国際交流活動あるいは人材育成活動を通して、お互いの成長を支援していくことやそういった場創りの大切さをさらに深く実感した一年であった。昨年の活動報告にも書いたことであるが、学生たちの創造性や潜在可能性、成長していく姿に触れる機会に恵まれ、このような場に関われることに喜びを感じるとともに、筆者自身にとっても学びの連続であり、心から感謝している。たくさんの学生たちの顔が思い浮かぶが、その内の何人かが「自分の本当にやりたいことが見つかった」と言って、勇気を持って自らハードな挑戦を課し実現していった。その背景にこ

うした活動が大きく影響していると聞くと、いかに我々の行なっていることが、学生たちの人生に関わっているのかと思い、改めて身が引き締まるとともに、畏敬の念と感謝の気持ちを感じずにはいられない。筆者の好きな言葉の一つに“心ある道に従う follow the Path of Heart”という言葉があるが、先の見えない時代だからこそ、独りよがりではなく外側と内側に起き

ていることに意識を傾け、しっかりと心に向き合い真の心の声を聴き、その心が指し示す道へと進んで欲しいと願っているし、自分自身もそのように生きていきたいと思っている。そして、今後とも、多様な背景を持つ我々がお互い共に学び成長し、各人の持っている個性ある力が十分に発揮され活かせるような場創りを進め、支援していけるように、力を尽くしていきたい。